

浅草寺病院だより

2020年
【冬号】

2020年1月10日発行
社会福祉法人浅草寺病院
東京都台東区浅草2-30-17
☎ 03-3841-3330

理念

観音さまの大慈悲のみこころにそって、
思いやりの精神のもとにあたためた医療を提供します。



新年を迎えて

病院長 黒田忠英

あけましておめでとうございます。2020年は、東京でオリンピックが開催される年であります。前回の東京オリンピックが1964年に開催されてから実に56年ぶりの開催で、教科書に載っているような歴史的なイベントを実体験できる非常に貴重な年であり、また活気に満ち溢れた良い年になることを期待しています。世界各国から多くの選手、観光客が日本を訪れ、この浅草の街もいつにも増して賑わうのではないかと思います。クーベルタンが唱えたオリンピックの精神とは「スポーツを通して心身を向上させ、文化・国籍など様々な違いを乗り越え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもって、平和でよりよい世界の実現に貢献すること」とされております。現在は、この「スポーツ」と「文化」に「環境」が加わり、世界が一つになるイベントではないでしょうか。そして、今回の東京オリンピック開催が決定したのは2013年9月、その後オリンピック開催に向けて多くの整備がなされてきました。開催決定から早くも7年が経ちましたが、その時のスピーチにあった「お・も・て・な・し」が、その年の流行語大賞に選ばれています。

流行語大賞といえば、昨年の大賞は「ワンチーム」でした。これは昨年行われたラグビーワールドカップ2019日本大会において、日本代表を率いるジェイミー・ジョセフヘッドコーチが掲げたスローガンだそうです。日本代表の快進撃の源は、チームが一丸となって戦ったことではないでしょうか。そして、もう一つ「4年に一度じゃない。一生に一度だ。」というキャッチコピーがありました。日本で、アジアで、初めてのワールドカップ開催ということで、新たな歴史をつくる大会でもあったようです。この大会においても、「お・も・て・な・し」の精神で海外の選手、観客、ファンが日本文化に触れる機会になったのではないのでしょうか。

浅草の街も多くの観光客が訪れ、賑わい、活気に満ちています。また、昔から多くの方々が住んでいる、住み慣れた町でもあります。高齢者人口も多くなり、町全体で高齢者を支える、地域包括ケアシステムが次第に浸透し、医療、介護、行政、そして住民の方々が協力し、町全体で高齢者を支えていく町を「ワンチーム」でさらに進化、結束させていくことが必要になってきます。質的な「ワンチーム」をみなさんと協力して作っていきたくと考えています。そして、オリンピックに向けて海外の方も多くいらっしゃると思います。言葉、習慣、文化も異なる方々とも、「お・も・て・な・し」の精神で浅草の町が一つになればと思っております。今年もよい年になりますように、祈念いたしております。本年もどうぞよろしく願いいたします。

浅草寺にも AED があります！

内科 岩崎 功明

PADとは、ご存知でしょうか？

PAD(public access defibrillation)の略であり、一般市民が施行する除細動を意味しております。2004年7月に法律改正により一般市民もAED(automated external defibrillator 自動体外式除細動器)を用いた除細動が可能となりました。ちなみに、2005年5月に福島第2原発事務所で発生した心肺停止状態の職員に対してAEDを使用し、救命した事案が我が国でのAEDを使った救命の第1号と伝えられております。

駅や学校、体育館、ホテルなど公共施設などで、AEDを見かけることが大変多くなりました。浅草寺にも、本堂と五重塔脇の警備室に配置されております。AEDの普及率は、平成28年までに約59万台が国内に配置され、8割ほどが非医療機関で残りが医療機関、消防の配置となっております。

我が国の心臓突然死は、約 6 万人(平成 22 年)と報告され高齢化もあり今後増加が予想されます。心臓突然死の原因は、不整脈が多いです。致死性不整脈の心室細動が発生すると心臓がケレンし除細動されなければ心臓は停止します。AED(自動体外式除細動器)は、パットを傷病者に装着すると不整脈を解析・評価し、必要とあれば治療(除細動)の指示まで全自動的に行ってくれます。ただし、治療に関してはスイッチを押さなければ行われません。除細動が、1 分遅れると、救命率が 7~10% 減少することがわかっており、より迅速な AED 使用が救命に重要と考えられています。

AED は、決して特別なものではありません。使用法も極めてシンプルです。普段より、AED の設置場所を把握し、心肺蘇生法の講習会に参加するなどしていただければ、いざ実際の現場に遭遇した場合に、より迅速に行動できるのではないかと思います。

関節リウマチかな?と思ったら

内科 松本 拓

2019 年 4 月より内科常勤医として外来及び病棟での診療をさせて頂いております。一般内科の診療がメインとなっておりますが、合わせて関節リウマチの診療も行っております。今回はその関節リウマチのお話をさせて頂こうかと思います。関節リウマチは 200 人に 1 人程の方が罹患される病気であり、決して珍しい病気ではありません。中年から高齢の方に発症することが多く、さらに男性に比べて女性に発症しやすい病気としても知られています。また、糖尿病などの一般的な病気と同じように「関節リウマチに少しなりやすい」という程度の遺伝的素因はありそうですが、原因は明らかになっておらず誰にでも発症する可能性があります。主な症状としては関節の痛み・関節の腫れ・関節の変形となりますが、特徴として①「左右ともに生じることが多い」、②「たくさん関節に生じることが多い」、③「手指・足趾・手首・足首などの小さな関節に生じることが多い」という点が挙げられます。以前は有効な治療法に乏しく、著しい関節変形を来し車椅子やベッド上での生活を余儀なくされるという方が多くいらっしゃいましたが、ここ数十年の間にリウマトレックス(メトトレキサート)や生物学的製剤という新しい治療薬が登場したことによって、早期治療を行うことで関節変形を残さずに日常生活を過ごして頂けるようになって来ました。ここで最も重要な点は「早期治療」という部分です。残念ながら、既に変形してしまった関節を元に戻す治療法はありません。また、変形してしまった関節による痛みや機能を改善することも困難を伴います。それでは「早期治療」を行うためにはどうしたら良いのでしょうか?そのために必要なのは「早期診断」であり「早期受診」ということとなります。関節リウマチかな?と少しでも思った場合は気軽に外来を受診して下さい。

電子カルテ導入後も変わらない本質

一般病棟 看護師

2019 年 9 月から電子カルテが導入されました。入院された患者さまや面会に来られたかたは、ノートパソコンの乗ったワゴンを押しながら廊下を行き来する看護師の姿を見かけたのではないのでしょうか。電子カルテ導入当初、慣れない業務に四苦八苦していましたが、数ヶ月が経ちやっと操作にも慣れてきたように思います。

電子カルテのメリットは、患者さまの既往歴や受診歴、アレルギーや処方された薬など外来・病棟問わず医療スタッフが情報を共有でき、連携が図れることにあります。また、入院時に患者さまに装着させていただくネームバンドによる認証システムで間違いや事故を防ぎ、安全な医療提供をおこなうことができます。

あくまで私たち看護師が対応するのは人であり患者さま、そしてそのご家族であるということです。巷で言われるような『パソコンの画面ばかり見て人をみない』という関わりはせず、目の前にいる患者さまの目を見て訴えを聴いています。ホームページの看護部紹介の冒頭に「思いやりのあるあたたかい看護・介護を提供します」とありますが、思いやりやあたたかさは人の手や眼差し、そして心で相手に伝わります。電子カルテは情報管理、安全管理の一つのツールとして利用しつつ、本質である思いやりのあるあたたかい看護の提供を継続しています。

